

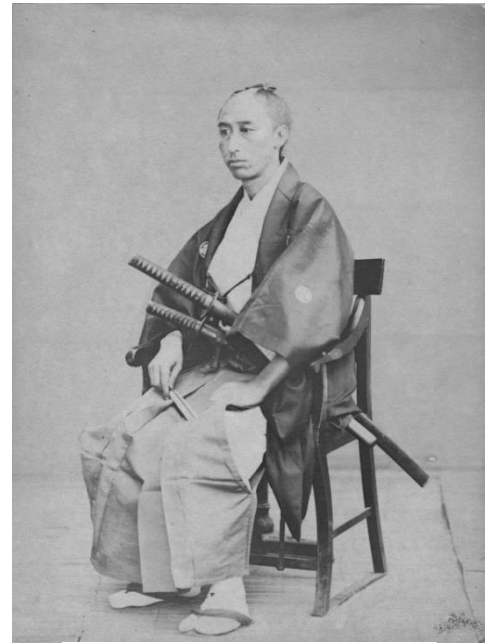
幕末酒田の異才 本間郡兵衛

葛飾北斎最後の弟子にして、薩摩藩の日本初の株式会社構想に参画した男

本間郡兵衛は、本間家分家の本間新四郎家に生まれました。幼いころから才気煥発で、蘭学・英学を学び洋学者として活躍。勝海舟やジョン万次郎、榎本武揚ら名だたる人物と親交を結ぶ一方、最晩年の葛飾北斎に弟子入りし、浦賀で黒船をスケッチするなど、画才にも秀で、並外れた好奇心と行動力を持つ人でした。

その後、薩摩藩に藩校教師として招かれましたが、同藩が構想した日本初の株式会社の実現に向け奔走するさなか、元号が明治に代わる直前の慶応4年(1868)7月、数え年47歳の若さでこの世を去りました。

郡兵衛の子孫である本間利美氏はじめ、多くの関係者にご協力いただいた本企画展では、手紙や手記、画帳、薩摩藩時代の文書、洋書など、貴重な歴史資料でもある遺品を多数展示し、非凡で人間味あふれる郡兵衛の魅力に迫ります。彼がその目で見て肌で感じた維新前夜の空気を感じていただければ幸いです。



ロンドンで撮影したといわれる
郡兵衛の肖像写真
個人提供

江戸末期の日本と酒田

世界情勢の変化と徳川政権の衰退

本間郡兵衛は文政5年(1822)、酒田に生まれた。この頃、江戸の繁栄を背景に「化政文化」(※)と呼ばれる町人文化が花開き、酒田港は北前船交易の活発化により大いににぎわっていた。

その一方、海外では18世後半にイギリスで起こった産業革命の波がヨーロッパ諸国、アメリカ大陸に及び、西欧列強各国のアジア進出が始まる。日本近海にはロシア、イギリス、アメリカの船が出没し、鎖国を続けてきた日本に対して通商を求めるようになる。

天保期(1830~1844)には、全国的な凶作による大飢饉が続き、天保8年に「大塩平八郎の乱」が起きると、大塩に共鳴する一揆が全国で続発した。庄内でも、天保4年に日照りや大雨、冷夏、秋の降雪などの異常気象により、大凶作に見舞われている。

幕府は財政の立て直しを図り、天保の改革を行う。しかし、不景気が続くなかで、生活や風俗を厳しく取り締まられ、人々の不満は高まる一方だった。

また天保11年(1840)には、極度な財政難に陥っていた川越藩松平氏を助けるために、川越松平氏を庄内に、庄内酒井氏を長岡に、長岡牧野氏を川越にそれぞれ転封(国替え)する「三方領知替え」を命じたが、庄内の領民たちの反対運動などにより中止された。幕府が一度出した命令を撤回したことは、前代未聞の事件であり、徳川政権の衰退を示すこととなった。

酒田で多感な青春時代を送っていた郡兵衛は、自分が洋学者としての道を歩み、維新前夜の動乱に運命を左右されることになるとは想像もしていなかっただろう。

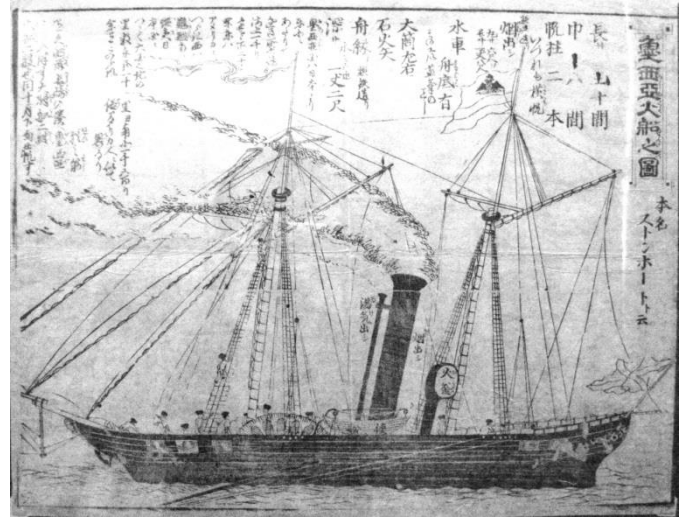
※化政文化…文化・文政時代(1804~30)の前後、江戸町人を中心に一般庶民に広まった文化。文芸・歌舞伎・など各分野に及び、文芸では滝沢馬琴、式亭三馬などが、浮世絵では葛飾北斎や安藤広重などが活躍した。

異国船の脅威と海岸防備

寛政4年(1792)、ロシアの使節ラクスマンが根室に来航して通商を求めたのを皮切りに、ロシア、イギリス、アメリカの船が相次いで日本沿岸に現れ、強く開国を迫るようになっていく。幕府は沿岸の諸大名に海防の強化を命じ、「異国船打払令」を出すなどして、列強の要求には応じようとはなかった。

しかし天保13年(1842)、清国がアヘン戦争でイギリスに敗れると、「薪水給与令」を出して、漂着した異国船には薪水・食糧を与えることを決めた。そしてアメリカのペリーが、嘉永6年(1853)、安政元年(1854)に軍艦を率いて浦賀に現れると、その軍事的圧力に屈して、ついに日米和親条約を締結。イギリス、ロシア、オランダとも同様に和親条約を結び、200年以上続いた日本の鎖国は終わりを迎えた。安政5年(1858)には日米修好通商条約が結ばれ、翌6年から貿易も始まった。

一方、庄内藩では寛政4年(1792)の幕府の命令に従い、吹浦(現遊佐町)、今泉村(現鶴岡市)、鼠ヶ関村(現鶴岡市)の3カ所に外国船見張番所を設け、浜中や大浜で砲術訓練を行っていたが、嘉永元年(1848)以降、庄内沖にひんぱんに異国船が現れるようになると、大砲を主体とした、より強固な沿岸防備に取り組み、海岸に砲台を築いた。洋式兵法を取り入れた大規模な海防訓練も行っている。



魯西亞(ロシア)火船之図／嘉永6年(1853)
アメリカのペリーが来航したこの年の7月、ロシア使節プチャーチンが軍艦4隻を率いて長崎に来航している。この時の様子を伝えた版画。

酒田付近での異国船出現と海岸防備の動き (嘉永元年～慶応三年)

年号 (西暦)	出来事
嘉永元年(1848)	4月15日、異国船が飛島沖に現れ、2、3発発砲する。このため庄内藩から飛島へ出陣する。亀ヶ崎家中足軽は吹浦を固める。
安政元年(1854)	4月、飛島沖に3、4千石の異国船が現れる。
安政2年(1855)	6月、異国船通行につき、酒田湊付近15カ所に砲台を築く。 7月、西浜3カ所に砲台を新設し、海防に備える。 12月、 ^{いきぼや} 五十集屋13人が台場築立につき、100両3カ年献上の旨を申し出る。
安政3年(1856)	2月、大庄屋清水理右衛門が海岸防備のため、十里塚から飯森山の間に松を植える。 6月、海岸防備の持割を定める。
安政5年(1858)	2月、異国船が宮野浦沖に現れる。 3月12日、アメリカ人が上陸して商物を望めば与えてもよいが、代金などは一切受け取ってはいけないとの御達が出される。 4月21日、箱館奉行支配組頭河津三郎太が酒田湊の形勢と輸出入貨物を調べる。 8月23日、異国船が見えたら日和山より太鼓を打ち、順次知らせよう三十六人集に達せられる。 この年から翌年にかけて、幕吏が出張して酒田の湊口を詳細に測量する。

年号（西暦）	出来事
安政6年(1859)	<p>3月、アメリカ船が酒田湊に寄港し測量するとの知らせがあったが来湊しない。庄内藩では異国船出現についてのお触れを出す。</p> <p>4月27日、箱館のロシア領事館員乗船ジキット号が飛島の勝浦に寄湊し、館員30余名が上陸して島内を視察する。この時、殺生禁断の霊場である賽の河原でウミネコを鉄砲で撃ち、料理にして食べたので、島民はショックを受ける。</p> <p>5月、飛島へアメリカ船が来て1泊し、翌日出港する。</p> <p>8月、イギリス船が新潟寄湊のついでに、酒田湊にも来湊するとの知らせが幕府からあったが、荒天のため来湊しない。この月、幕府の正使青山某が来酒する。</p> <p>9月、イギリス船二隻が飛島に寄湊し、舢舨で近海を測量する。</p> <p>12月、幕府役人が来酒し、4日間にわたり湊口を測量する。</p> <p>イギリス船渡来で、上内町、淡路小路東口など4カ所に新たに木戸を立てる。</p>
万延元年(1860)	イギリス船二隻が飛島に寄湊する。イギリス水路測艦アクタコン号の軍医アサー・アダムスは、タブ林の湿地帯に生息しているトビシママイマイを発見し、翌年学界に発表する。
文久元年(1861)	<p>7月、江戸から飛脚が来て、イギリス船が測量のために来湊すると報じる。</p> <p>海辺の者で海上でひそかに異国船に米を売る者が多く、禁じられる。</p>
文久3年(1863)	庄内藩が宮野浦に家宅を建て、藩士長尾内記を主将として25戸を移住させ、海岸を警備する。
慶応3年(1867)	イギリス測量船が宮野浦沖に来航する。

自然災害が相次いだ天保4年の大飢饉

天保4年(1833)から同7年(1836)にかけて続いた全国的な大凶作により、「天保の飢饉」と呼ばれる大飢饉が日本を襲った。庄内も例外ではなく、異常気象による自然災害に明け暮れた天保4年の飢饉は、後世まで「巳年飢饉」として語り継がれた。

この年の庄内は、田植えの時期に日照りが続いた。6月26日には豪雨による大洪水が発生し、酒田ではいろは蔵(酒田商業高校跡地)の米4万俵が水浸しになった。その後も気温は上がり冷夏となり、9月26日には雪が降り、稲刈りの終わらない田に1尺(約30センチ)あまりも積もった。10月26日には津波を伴う大地震が起き、大きな被害をもたらしている。

米は2倍に値上がりし、貧しい家の家計を直撃した。庄内藩では救済策として、救米を支給し、せがゆ施粥(炊き出し)を行った。酒田では、役人や商人たちが、米の支給や炊き出しを実施。酒田の町人たちはその恩に報いようと、天保8年(1837)に正徳寺にほうきょういんとう宝篋印塔を建立した。



正徳寺にある宝篋印塔
撰文は、幼い郡兵衛の師だった小松周輔による。

庄内を揺るがした「天保の国替え事件」

天保11年(1840)11月、幕府は、武蔵野国川越の松平氏を出羽国庄内に、庄内酒井氏を越後国長岡に、長岡牧野氏を川越にそれぞれ転封(国替え)する「三方領知替え」を突然命じた。極度の財政危機に陥っていた川越松平氏が、前の将軍家斉のいえなり実子なりさだ齊省を養子として迎えたのを利用し、実収高の高い藩に移りたいと願い出たことが、事の発端だった。

長岡の石高は7万石。庄内14万石の半分に過ぎず、庄内藩は財政縮小の危機に直面した。庄内の農民たちは、新領主による検地や増税が行われるのではと不安を募らせ、酒井氏の転封を阻止する以外に解決の道

はないと、転封反対運動に立ち上がった。

農民たちは、江戸に上って幕府の要人に直訴を行い、隣藩の大名に嘆願した。地元では「百姓たりといえども二君に仕えず」などの幟を掲げ、何万人規模の大集会を開くなどして、必死の抵抗を続けた。

地主や商人は資金を援助し、庄内藩でも強い規制をすることはなく、直訴という御法度を犯したにもかかわらず、役人の取り調べも寛大なものだった。むしろ、藩主を慕い、庄内に留まることを願った農民たちは「百姓の鑑」と称賛された。

ついに天保12年(1841)7月、転封中止の幕命が下される。諸大名の間にも転封令への反感が広まったことや、家斉、斉省が亡くなり状況が有利に変わったこともあるが、農民たちの決死の行動が、将軍家慶を動かしたといえる。絶対的だった徳川政権に見え始めたかげりを象徴する事件である。

好奇心旺盛な幼少年期

郡兵衛が生まれた本間新四郎家

本間郡兵衛は、文政5年(1822)9月に本間家本家の分家である本間新四郎家に生まれた。本名は光喜^{みつため}。幼名は規矩治^{きくぢ}で、後に郡兵衛と改めた。

本間新四郎家は、享保17年(1732)、本間家本家の初代原光の二男新蔵が、本町二丁目(現二番町)に分家したといわれる。新蔵は新四郎と改名し、代々、新四郎または信四郎を襲名した。三代光味^{みつちか}は、安永3年(1774)から天明5年(1785)にかけて、本家4代正五郎の代人として手腕を発揮している。

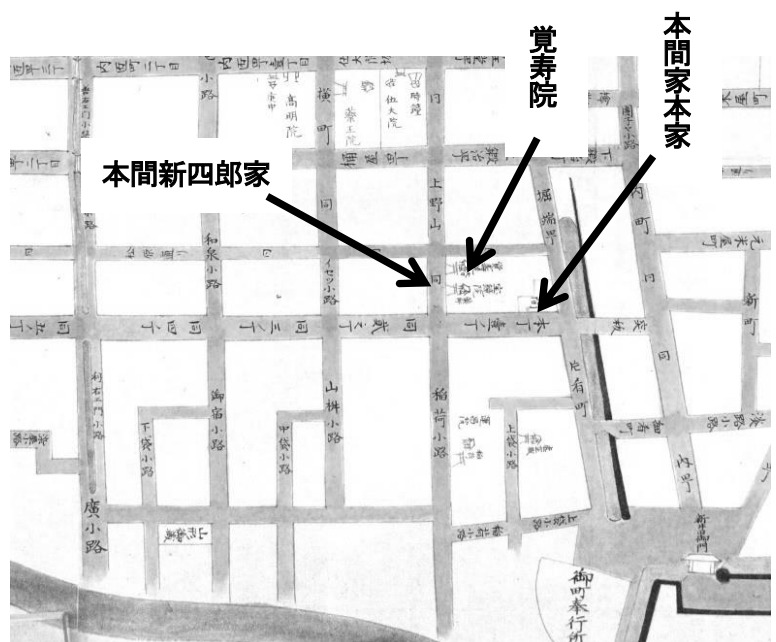
郡兵衛の父である6代国光(通称豊蔵)は、少年時代に米沢藩校「興讓館」に入り、優秀な成績を修めて酒田に戻ると、自宅で塾を開いている。漢詩にも長じ、当時の酒田を代表する教育者であり、文化人だった。

その長男で、郡兵衛の兄の光恕^{みつひろ}(通称礼蔵)も学問に優れ、維新後の明治6年(1873)には山椒小路(現本町二丁目)にあった椒坊学校の、同9年には県令三島通庸が十王堂町(現二番町)に創設した鳴鶴学校の教師になっている。

好奇心旺盛で女子にも人気だった青春時代

教育者であった父と兄のもとに生まれた郡兵衛は、幼い頃から、家のすぐそばにあった覚寿院で開かれていた輪講会に参加し、医師の小松周輔から儒学の四書五経などを学んだ。記憶力が良く、のみ込みの早い郡兵衛は、特別にかわいがられた。

覚寿院に行く以外には、家で本を読んだり、絵を描いたり、彫刻をしたりしながら、一人で楽しんでいた郡兵衛は、成長とともにその才能を磨いていった。当時はやっていた山東京伝や滝沢馬琴などの読み物を愛読し、自分でも小説を書いて、いっばしの戯作者を気取っていたらしい。多才だった郡兵衛は、弁も立ち、色白の美男子でもあったため、同じ年ごろの若者や女の子にとってあこがれの存在になっていった。



郡兵衛が生まれた文政5年(1822)頃の酒田町絵図

幼い郡兵衛が学んだ小松周輔

幼かった郡兵衛が四書五經の訓読を学んだ小松周輔は、寛政10年(1798)、酒田鍛冶町(現二番町)に生まれた。子どもの頃から勉強が好きで、家業の鍛冶職にいそしむ傍ら、近所の覚寿院に通った。江戸に遊学する機会を与えられると、漢方医学を学び、帰郷後、家業は妹夫婦に任せて医者になった。

覚寿院では、以前から経書輪講会が開かれていたが、文政12年(1829)、経史百家から仏典まで多くの本を読破し、算術にも精通した識者で、性格温厚な小松は、周囲から推されて会主となった。以来40年以上にわたって多くの門弟たちを育成した。

天保4年(1833)、豪商・白崎五右衛門(一実)が医会所を設立すると、儒学や医学を教えた。万延2年(1861)には御町医筆頭になっている。明治7年(1874)没。



現在の覚寿院跡。右は薬師神社で、左側が覚寿院のあった所。

20代 さまざまな師との出会い

失意の出奔から洋学者の道へ

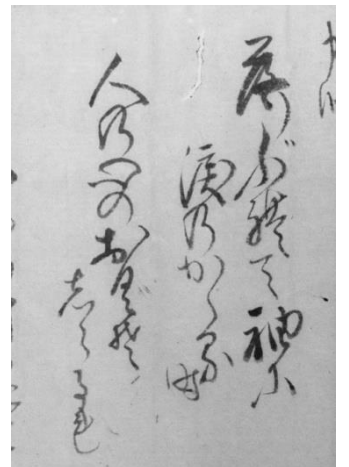
将来を期待されていた郡兵衛だったが、しだいに今町、船場町の遊里に出入りするようになる。酒好きも災いし、ついに兄の礼蔵から厳しく叱責を受けることになった。これが骨身にこたえた郡兵衛は、一大決心をして江戸に出て、親族である本間光憲の家に身を寄せた。

男として名を上げるためにはこのままではいけないという気持ちがあったようだが、逆に礼蔵の怒りに油を注いだ。弟の先行きを心配し、何とか世に出したいと考えた礼蔵は、酒田に連れ戻すと、以前から金子の融通などで密接な関係にあった秋田の矢島藩士小番郡八の養子にした。

矢島藩主に才覚を認められ、江戸へ上る時に同行して仕えた郡兵衛は、向学心に燃え蘭学を学び始めるが、女性関係で問題を起こしたらしく、小番家から離縁を言い渡される。伯父の取り計らいにより復縁を許されるのだが、天保14年(1843)、23歳の時に養家を出奔。再び江戸で蘭学を学び始める。

この頃、郡兵衛は生活費と学費を得るためか、絵と彫刻の技術を身に着けようと考え、今では世界的に知られている浮世絵師・葛飾北斎に弟子入りして絵を学んでいる。また日本で唯一オランダとの交易を行っていた長崎に遊学して見聞を広げた。

江戸に戻った郡兵衛は、蘭学の権威であった杉田成卿に入門し、医学、天文、地理、化学、歴史、算数、西欧諸国の政治経済、兵制など、幅広い範囲の学問を学ぶ。並み外れた行動力を発揮して食欲に師を求め、知識を吸収し続けた郡兵衛は、西欧列強の脅威にさらされた日本の政治情勢に深い関心を寄せながら、洋学者への道を進んでいく。



落ちぶれて
袖に涙のかかる時
人の心の奥ぞ
知らるれ

養家から離縁され、復縁を許された郡兵衛は、軽率な行いをした後悔をつづった手紙を兄に送った。その中に書いた歌。

個人提供

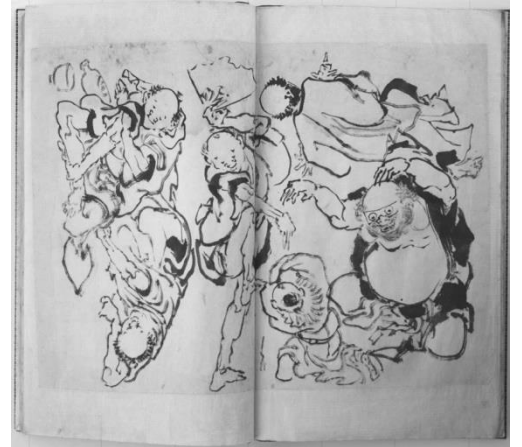
葛飾北斎最晩年の弟子になった郡兵衛

郡兵衛が葛飾北斎の弟子だったことは、一般的にはほとんど知られていない。入門した時期やいきさつについても、記録がないため、はっきりしたことは分かっていない。

郡兵衛は北斎から「北曜」という雅号をもらい、手紙の署名にもひんぱんに使うほど気に入っていたのだが、郡兵衛の遺品に「天保十四年歳（中略）北曜」と彫られた物差しがあり、遅くともこの年には弟子になったと推測されている。

また、嘉永元年(1848)に長崎に游学した時の旅日記「羽州飽海大泉荘北曜西肥長崎行日記」(鶴岡市郷土資料館蔵)には、長崎に向かう前に卍翁(北斎)を訪ねたことが記され、その時にもらったと思われる北斎の肉筆画「着衣鬼図」(佐野美術館蔵)も現存している。

北斎はその翌年に亡くなっていることから、最晩年の弟子であった郡兵衛が残した記録や手紙、作品は、晩年の北斎の動向を知る上でも貴重な資料となっている。



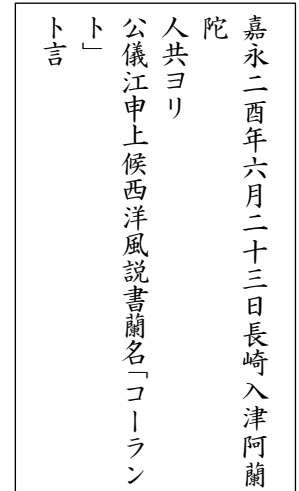
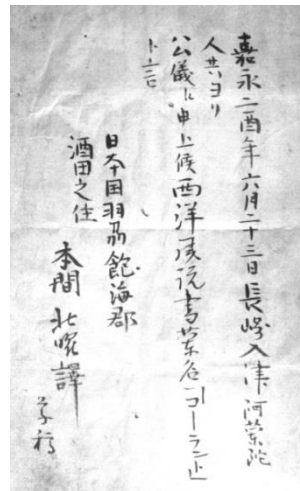
郡兵衛の画帳 個人蔵

27歳で初めての長崎游学へ

嘉永元年(1848)、27歳の郡兵衛は、南蛮貿易の玄関口だった長崎へ游学する。

蘭学を原書で読みたいという気持ちが強くなっていた時に、長崎に行って通訳になると手に入れやすいと聞いたのがきっかけだったらしい。

この年の5月、酒田に帰省して準備を整え、6月に江戸を出発。8月から9月までの約1カ月間を長崎で過ごした。滞在中、通弁官・穎川藤三郎らに会って、一緒に出島に出かけたり、西洋人とブドウ酒を飲みながら西洋の事情について聞いた。目的だった洋書も自由に読むことができたが、それ以上に、書物からは得られない体験をしたことが大きな収穫となり、必ずまた来ようと心に誓って帰った。



嘉永2年(1849)、郡兵衛は、長崎に来たオランダ人が持っていた、西洋事情を記した「コーラント」を譲ってもらい、「西洋風説書」として訳している。最初のページには、酒田の出身であることが書いてある。
個人提供

こぼれ話 酒田から静岡県三島市に渡った「着衣鬼図」

郡兵衛は長崎へ向かう前に北斎を訪ね、北斎から肉筆画「着衣鬼図」をもらっている。

この絵は、昭和22年(1947)に開館したばかりの本間美術館で展示されたのを最後に、行方が分からなくなっていたが、昭和58年(1983)、浮世絵研究家の故・永田生慈氏によって静岡県三島市の佐野美術館で発見され、大きな話題となった。

佐野美術館を創立した故・佐野隆一氏は、三島市に生まれ、大正14年(1925)に株式会社鉄興社を設立。昭和13年(1938)から、造成されたばかりの大浜工業地帯に鉄興社酒田大浜工場(現東北東ソー)を操業し、戦時中から戦後にかけて、酒田の重化学産業発展の基礎を築いた人物である。骨董収集家としても知られている。

昭和22年当時の鬼図の所有者は、酒田の素封家・小山太吉だった。それが、いつごろ、どのように佐野氏が所有することになったのかは分からないが、本間美術館での展示がきっかけになったと考えてもおかしくはない。

彫刻の師 ^{ちくようさいともちか}竹陽齋友親との親密なつながり

郡兵衛は江戸巢鴨に住んだ根付師・竹陽齋友親から彫刻を学んだ。『根付の研究』（上田令吉著、昭和18年）には、最も活躍したのは文政から天保のころで、北斎漫画風の根付を多く作ったと書いてある。北斎とも顔見知りだったのかもしれない。

郡兵衛は、安政3年(1856)に江戸を離れて長崎に移り住み、イギリスの英学を学ぶのだが、竹陽齋は、郡兵衛の英学の師であるフルベッキに、何か彫刻をプレゼントしたいので、希望のデザインを聞いてほしいという内容の手紙を送っている。ほかにも、近況報告や江戸での出来事などをつぶさに記した手紙が何通も残っている。普通の師弟関係を越えた親しい間柄だったのだろう。

蘭学の師・杉田成卿 ^{せいけい}

杉田成卿は、郡兵衛がこの人と見込んで入門した蘭学者である。文化14年(1817)、江戸に生まれてオランダ語文法を学ぶ。天保11年(1840)、幕府の天文台訳員となって蘭書の翻訳に従事し、弘化元年(1844)にはオランダ国王からの国書の翻訳に携わった。安政3年(1856)、郡兵衛が所員となった蕃書調所の教授職に就任したが、3年後の安政6年(1859)に亡くなった。

30代 洋学者として飛躍

開国とともに蘭学者として躍進

郡兵衛は杉田成卿のもとで、蘭学者としての実力を身に付けていった。嘉永6年(1853)、アメリカのペリーが艦隊を率いて浦賀に来航し、翌安政元年(1854)、ついに日本が開国すると、その人生も大きく花開いていく。

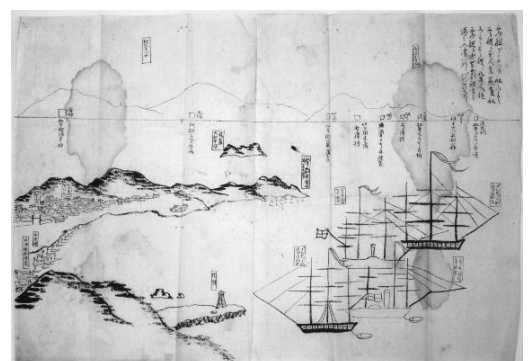
安政2年(1855)、幕府が洋学研究機関である蕃書調所 ^{ばんしょしらべしょ} を設立すると、郡兵衛は、異国応接掛附蘭書翻訳御用を務めていた勝海舟の推薦を受け、翻訳事業などに従事する所員に選ばれた。蘭学者・本間郡兵衛の名前は、蘭学修業のために江戸に上ってくる青年たちの知るところとなり、学ぶ側から教える側に立つようになる。進歩的な考えを持つ知識人たちとの交流も活発になっていく。

それもつかの間、勝の要請を受け、長崎海軍伝習所の通辞(通訳)になるために、再び長崎に赴いた郡兵衛は、仕事を通じて海外情勢を知るにつれ、これからの時代に必要なのは蘭学ではなく、より新しい英学であると痛感する。幸運にも、アメリカから渡ってきた宣教師・フルベッキという最良の師に出会い、英学を自分のものにしていった。

浦賀で黒船をスケッチ

右図は、嘉永6年に浦賀にアメリカの黒船が入港した時の様子を、郡兵衛が描いたもの。彼が黒船を描いた絵としては、本間美術館に所蔵されている「アメリカ船図」(酒田市指定文化財)がある。

初来航時の黒船を実際に自分の目で見て、精密な絵画として描いた日本人は郡兵衛ただ一人といわれている。



郡兵衛筆 浦賀へのアメリカ船来航の図

個人蔵

勝海舟に蘭学者として認められる

勝海舟(麟太郎)といえば、坂本龍馬の師であり、神戸海軍操練所を設立し咸臨丸で渡米、幕府側代表として西郷隆盛と会見し、江戸城無血開城を実現したことなどが知られる、もっとも有名な幕末の日本人のひとりである。

勝は、郡兵衛の蘭学者としての実力を高く評価していた。『新撰洋学年表』(大槻如電著、大正15年)に、安政2年(1855)に勝海舟が記した江戸在住蘭学者の一覧が掲載されているのだが、58人の蘭学者の中に郡兵衛の名前も入っていることから、それが分かる。

同年、郡兵衛を蕃書調所の所員に推挙し、勝塾の教師に迎えた。さらにこの年、長崎海軍伝習所に入門した勝は、郡兵衛を通辞(通訳)として呼び寄せている。郡兵衛は、「和蘭文典字類」を編さんすることを条件に、江戸京橋の染物屋・いとや彦助から経済的な援助を受けて、翌年に長崎に赴いた。いとやがパトロンになったのも、勝の計らいだったらしい。

長崎に移り住んだ郡兵衛は、より新しい学問だった英学の道に進んでいく。さまざまな人との出会いが、彼を洋学者として成長させたが、勝に認められたことが大きな原動力になったといえる。



勝 海舟
文政6年(1823)～明治32年(1899)

写真：国立国会図書館デジタルコレクションより

長崎留学について

安政3年(1856)、「和蘭文典字類」を編さんすることを条件に、糸屋彦助の援助を受けて長崎に移り住んだ郡兵衛は、名目上、長崎海軍伝習所生である伊沢謹吾の家来ということになっていた。謹吾は、長崎奉行を勤めたこともある伊沢政義の息子で、伝習所では艦長役などを務めて活躍している。

2人は勝海舟と糸屋を通じて出会ったらしい。蘭学を学んでいた謹吾は、以前から「和蘭文典字類」を編さんしたいと思っていたが、郡兵衛と親しくなり、糸屋がパトロンになってくれたおかげで、郡兵衛の長崎行きと同時に、字類の編さんが実現した。そこで謹吾は、いわば郡兵衛の身元引受人になったのだろう。

字類は、糸屋が事業に失敗したことなどが原因で完成しなかったとも、何らかの形で出版されたともいわれるが、今確認できるのは、印刷された序文3枚だけである。

同郷の青年たちとの交流

現在残っている手紙からは、郡兵衛は人付き合いを大切にしていたことが伝わってくる。それは同郷の青年たちとの付き合い方にもいえる。

郡兵衛に送られた手紙には、郡兵衛を杉田成卿に紹介した鶴岡の蘭学者・小関高比子、遊佐に生まれ、明治維新後、東京―横浜間の鉄道敷設に尽力した佐藤政養(与之助)、同じく遊佐出身で、砲術家として将来を期待されながら若くして亡くなった真島雄之助からの手紙がある。

手紙はないが、清川八郎とも顔見知りだった。与之助と雄之助を連れて訪ねたこともあったそうだ。

初代^{てつどうのすけ}鉄道助になる佐藤与之助(政養)…遊佐出身

佐藤与之助(政養)は文政4年(1821)、遊佐郷升川(現遊佐町)の貧しい農家に生まれながら、維新後の新政府で日本の鉄道事業の礎を築き、鉄道の父と称された人物である。

幼少期から親孝行で、農業に励む傍ら彫刻と俳諧をたしなんだという。天保11年(1840)に起きた天保国

替え事件では、庄内の農民たちが起こした反対運動に加わっている。

嘉永6年(1853)、一念発起して江戸に上り、荻野流の砲術家・広木貫助に入門。安政元年(1854)には勝海舟の塾に入り、翌年には長崎海軍伝習所生となって、勝について長崎に赴く。安政6年(1859)、勝とともに江戸に戻ると、軍艦操練所蘭書翻訳方を仰せつけられ、庄内藩御組外徒士格となる。その後、大坂表御台場築立御用、摂海御台場御取立御用などを務め、慶応2年(1866)、大坂台場詰鉄砲奉行となる。

維新後、新政府の鉄道助として東京―横浜間の鉄道敷設に尽力。明治10年(1877)、57歳で病没した。

2人の交流は、江戸に上って間もない与之助が、真島雄之助とともに郡兵衛を訪ねたことから始まり、郡兵衛が亡くなる直前まで続いた。



佐藤与之助(政養)
明治時代、鉄道助の正装をして
撮った写真。 個人提供

将来を期待されながら、34歳で亡くなった真島雄之助…遊佐出身

真島雄之助は、文政8年(1825)、遊佐郷宮野内組大井村(現遊佐町)の大組頭を務めた真島家に生まれた。学芸一般に秀でた父親の真島義教(佐藤治)は、与之助の少年時代からの師であり、江戸に上った雄之助と与之助を経済的に助けた。安政元年(1854)、庄内藩が品川五番台場の警備を幕府に命じられた際、雄之助と与之助はその任に当たっている。

その後の活躍が期待された雄之助だが、安政4年(1857)に肺を病み、翌年34歳で亡くなった。

最良の師であったフルベッキとの交わり

郡兵衛に英学を教えたアメリカ人宣教師G. H. フルベッキは、安政6年(1859)に長崎に来航した。

天保元年(1830)、オランダに生まれ、幼い頃から英語、ドイツ語、フランス語、オランダ語を話し、機械工学を学んだフルベッキは、長崎や佐賀で、語学をはじめ政治、科学、兵事などについて教える。門下生には大隈重信、副島種臣などがいた。明治維新後、彼らが政府の高官になると、大学南校(現東京大学)の教頭として東京に招かれ、政府顧問として外交や教育、信教の自由について助言を与えた。明治4年(1871)の岩倉使節団の海外派遣も、フルベッキの提案に基づいており、日本の近代化に尽くした大恩人である。明治31年(1898)、東京で亡くなった。

郡兵衛はフルベッキから英学を学んだだけでなく、来日間もないフルベッキに日本語を教えている。フルベッキがアメリカの改革教会伝道局に送った報告書簡の中には「私の日本語教師は教育のある人物で、オランダ語も少し分かるので、かなり助かる」と書いてあり、郡兵衛の才能を評価していた。

『明治百話』(篠田鉦造著、昭和6年)には「私は本間さんを先生として日本語を研究しました。その人は東北の人なので仮名づかいが、たいは、たえになり、まえは、まいになるので困りましたが、よくわかる人でした」と、酒田出身の郡兵衛らしい逸話も披露されている。



郡兵衛が描いたフルベッキ夫妻の肖像画
個人提供

信頼関係も深く、攘夷運動が激しさを増していた文久3年(1863)、フルベッキ夫妻が上海に避難した際には、留守宅を預かっている。

幅広い学識があり、人柄も誠実そのものだったフルベッキから学べたことは郡兵衛にとって、これ以上ない幸せだったに違いない。

こぼれ話 郡兵衛は海外に渡ったのか？

フルベッキから英学を学んでいた文久2年(1862)頃、郡兵衛は念願だった海外渡航を実現したらしい。1枚だけ残っている肖像写真は、ロンドンで撮影したといわれているが、その根拠となる確実な資料は見つかっていない。

一つ所にとどまることなく、突然すぎる死を迎えることになった郡兵衛の人生には謎が多い。

40代 長崎から鹿児島へ

薩摩藩校「開成所」の英語教師に就任

蘭学と英学を学び、洋学者としての申し分のない実力を身に付けた郡兵衛は、さらなる転機を迎える。薩摩藩が、藩士たちに西洋の学問を学ばせるために元治元年(1864)に設立した「開成所」の英語教師に就任したので。

日本の南端に位置する薩摩藩では、天保11年(1840)のアヘン戦争以降、西洋列強に対抗するため、西洋の科学技術を導入した海防の強化に取り組んでいた。嘉永4年(1851)に藩主となった島津斉彬^{なりあきら}は、さらなる軍備の近代化を図り、反射炉や溶鉱炉、ガラス工場などを次々に建設。これらの工場群を「集成館」と名付けた。

斉彬の死後、集成館事業は縮小されるが、文久3年(1863)の薩英戦争後、島津久光によって再興される。開成所の設立も斉彬の遺志を継いだ事業だった。

郡兵衛は、全力を傾けて英語教育に当たり、明治の日本を支えていくことになる俊英たちとの親交を深めた。戊辰戦争が起こるのは、開成所設立からわずか4年後の慶応4年(1868)であるが、自分の故郷である庄内藩と薩摩藩の間に敵対関係が生じるとは知る由もなく、充実した教師生活を送っていたのではないだろうか。

郡兵衛を推薦した薩摩藩士・石河確太郎

郡兵衛が開成所の教師になったのは、洋学者でもあった薩摩藩士・石河確太郎からの依頼を受けてのことだった。

確太郎は大和国(現奈良県)の生まれだが、島津斉彬に見込まれて薩摩藩に仕え、集成館事業推進のための研究や実験、洋学所(開成所)開設のための調査などに取り組んでいた。斉彬の急死後、これらの事業は途絶えかけていたが、薩英戦争をきっかけに再び動き出し、藩命を受けた確太郎は長崎で英学を学びながら、教師にふさわしい人物を探した。そして白羽の矢を立てたのが郡兵衛だった。

確太郎は弘化3年(1846)、郡兵衛と同じ杉田成卿に入門し、その後長崎に遊学している。郡兵衛が入門したのは3年後の嘉永2年(1849)。その時点で接点があったかは分からないが、藩の将来を支える人材の育成を託すことを考えれば、才覚や人柄をしっかりと見極めたうえで、郡兵衛を選ぶに至ったのだろう。

この出会いは、確太郎が主になって進めた「薩州商社設立」という壮大な構想につながり、幕末の動乱のなか、郡兵衛の人生を左右することになる。

石河 確太郎

文政8年(1826)～明治28年(1895)

大和国(現奈良県)に生まれ、弘化3年(1846)に江戸に上って、蘭学者・杉田成卿に入門。その後、長崎に游学し、複数の藩から召し抱えの要請を受けたが、安政2年(1855)、薩摩藩に仕える。藩主・島津斉彬の殖産興業策に従い、斉彬が亡くなった後もその遺志を継ぎ、鹿児島紡績建設、蒸気船の建造などの事業に携わった。開成所教師も勤めた。

維新後は明治政府に出仕し、富岡製糸場の機械据え付けをはじめ、全国各地で紡績工場の設立に紡績技術者としてかかわった。

郡兵衛と交流があった人々

洋学者として認められるようになった郡兵衛は、幕末から明治期にかけて活躍した人々と交流を持ち、それを示す手紙が残っている。

①榎本 武揚(釜次郎) 天保7年(1836)～明治41年(1908)

戊辰戦争では旧幕府軍として軍艦を率い、五稜郭の戦いで敗れた後は、新政府の要職に就いた榎本武揚。展示した手紙には、正月10日に江戸に戻り、郡兵衛から預かった書状を京橋の糸屋に届けたこと、郡兵衛への贈り物として、当時流行していた形のキセルを同封したことなどが書かれている。郡兵衛が長崎に行く際に身元引受人となった伊沢謹吾の名前も登場する(伊沢は榎本の友人でもある)。

榎本は安政3～5年(1856～58)に海軍伝習所で学び、江戸の築地軍艦操練所教授になっていることから、その頃を書いた手紙かもしれない。



榎本武揚

写真：国立国会図書館デジタルコレクションより

②ジョン万次郎(中濱 万次郎) 文政10年(1827)～明治31年(1898)

土佐(高知)生まれの漁師だったが、15歳の時に遭難してアメリカの捕鯨船に助けられ、船長の厚意により、アメリカで教育を受ける。帰国後は幕府に登用され、外交文書の翻訳、軍艦操練所教授などを務めた。維新後は開成学校(東京大学の前身)教授となった。

郡兵衛への手紙は、今日は暇なので江戸節でも聞かせてくれませんかという軽い内容のもの。帰国時、日本語を忘れていたといわれ、書道にも苦労したのではないだろうか。

③前島 密(巻 退蔵) 天保6年(1835)～大正8年(1919)

郡兵衛とともに開成所の教師になった人物の中に、明治新政府で郵便事業を確立し、肖像画が1円切手に使われていることでも知られる前島密がいる。当時の名前は巻退蔵。郡兵衛の遺品の中には、石河確太郎が郡兵衛と巻退蔵に送った手紙が残っている。



前島 密(巻退蔵)

写真：国立国会図書館デジタルコレクションより

④清水^{とうこく} 東谷 天保12年(1841)～明治40年(1907)

江戸浅草に生まれ、明治時代に写真家、画家として活躍した。狩野派の画家だったが、安政6年(1859)、長崎に赴き、日本の植物を研究するドイツ人医師・シーボルトの下で、植物の写生を手伝った。この時に洋画と写真術を学び、明治5年(1872)に写真館を開業。後に宮内庁の御用絵師になった。

東谷は郡兵衛より19歳若く、どの程度の付き合いがあったのかは分からないが、郡兵衛に宛てた手紙にはフルベッキと竹陽齋の名前が出てくる。

フルベッキについては、長崎から江戸に戻った東谷がフルベッキの手紙を横浜ホール(アメリカ公使館か?)に持参して、本を注文してもらったとあり、フルベッキが洋書購入の仲介をしたことがうかがわれる。

竹陽齋については、郡兵衛から預かった手紙を竹陽齋友親に届けたところ、東谷を訪ねてきたとある。郡兵衛が江戸を離れて10年近くたっているが、竹陽齋が郡兵衛をずっと気にかけていたことが分かる。

⑤安保^{あほ} 清康(林 泉三) 天保14年(1843)～明治42年(1909)

明治維新後の海軍創設に携わった軍人。備後国(現広島県)に生まれ、漢学、医学を学んだ後、長崎で英学を修め、小松帯刀、西郷隆盛に請われて薩摩藩海軍の養成に当たっている。

手紙は書き出しに「閏五月」とあることから、慶応元年(1865)に書かれたと推測できる。郡兵衛からの贈り物か、落花生をフルベッキに渡し、とても喜んでもらえたと書いてある。

郡兵衛とは長崎か鹿児島で知り合ったと思われる。

晩年 運命を左右した薩州商社

日本初の株式会社設立構想に参画

慶応2年(1866)、郡兵衛は開成所教師を辞職し、酒田に帰郷したいと願い出る。長崎遊学の準備のために戻った嘉永元年(1848)以来の里帰りである。懐かしい肉親や親類縁者に会って、両親の墓参りがしたいという思いがあっただろうが、一番の目的は、薩摩藩が構想していた「薩州商社」の設立準備を進めることにあった。

薩州商社の構想は、全国の産物を取り扱う貿易商社を、広く各藩の商人などから資本金を募って設立するというもので、先進的な株式会社の設立を目指していた。薩摩藩家老・小松帯刀、西洋経済の現状を視察してきた藩士・五代友厚などの支持を得て、郡兵衛の盟友だった石河確太郎が中心となって実現に向けて取り組んだ。

日本の株式会社の先駆けとしては、坂本龍馬の海援隊(亀山社中)、幕府が計画した兵庫商社が知られている。初めて正式な形で設立したのは慶応3年(1867)の兵庫商社といわれることが多いが、設立に関する上申は薩州商社の方が早く、株式会社構想としては薩州商社が最初であるといえる。

郡兵衛は、英語教師として働いていただけでなく、この先進的な株式会社構想に参画していた。いつから、どんな形でかかわっていたのかははっきり分かっていないが、東北方面の交易拠点を整備するという重要な役割を与えられていたのは確かなようだ。故郷であり、北前船寄港地としてにぎわう酒田は、その足がかりを築くための協力を得るのに最適の場所だった。

しかし、酒田に着いた慶応3年(1867)、薩摩藩と庄内藩の関係は緊迫の度合いを増していった。薩摩のスパイではないかと疑いをかけられ郡兵衛は、表立った行動ができなくなっていく。

この年、ついに幕府は滅亡し、新政府が樹立。翌年、戊辰戦争が始まると、郡兵衛に対する監視の目はいっそう厳しくなる。そして年号が明治に代わる直前の7月、大望を果たせないまま、幽閉されていた鶴岡の親戚の家でこの世を去った。47歳という若さだった。

大坂滞在中の郡兵衛の動向

慶応2年(1866)12月に鹿児島を発った郡兵衛は、翌年1月に大坂に着き、半年間滞在中にいた。大坂では、百間町薩州屋敷にいた石河確太郎の兄(弟?)武二郎のもとに身を寄せた。武二郎もまた、薩州商社設立にかかわった人物である。

郡兵衛は、石河確太郎・武二郎兄弟、大坂の回船問屋で薩摩藩御用商人の平野屋策之助といった商人たちと、商社の実現に向けて準備を進めた。また、薩州商社にかかわることと思われるが、薩摩藩から仕事を託され、何度か京都に出向いて関白・九条尚忠などを訪ねている。

この頃、佐藤与之助は鉄砲奉行として大坂にいた。郡兵衛は平野屋に与之助の所在を調べさせると、早速訪ねて旧交を温めた。慶応3年7月、郡兵衛は藩の仕事を終え酒田へ向かった。この時、別れを惜しんだ与之助は、自分の写真を郡兵衛に渡したといわれている。



「薩州本間郡兵衛」と書かれた荷札

個人提供

志半ばで迎えた突然の死

酒田に戻ったものの、政局が緊迫するなか、表だった活動ができなくなった郡兵衛は、実家で書画や彫刻を楽しみながら過ごすしかなかった。彼が薩摩藩のスパイではないかと疑われ、動向を監視されていたことは「亀ヶ崎足軽御用帳」(酒田市立光丘文庫蔵、酒田市指定文化財)に、郡兵衛に関する記述が残っていることから分かる。

年が明けた慶応4年(1868)、ついに戊辰戦争が始まり、戦いが激化するにつれ、郡兵衛への監視の目も厳しくなった。そんなある夜、郡兵衛はうさばらしに外に出たが、島津家の家紋が入った紋服を身につけていたといわれる。これが尾行中の藩吏の目にとまった。

郡兵衛は鶴岡の親戚宅に幽閉され、精神的に追い詰められていく。それから間もない7月17日に座敷牢で急死したのだが、藩医から渡された薬を飲んで間もなく亡くなったと伝えられている。表向きには病死とされているが、毒殺されたともいわれている。

志半ばでの突然の死は、家族や友人、理想の実現をともに目指した仲間に、どれほどの悲しみを与えたか分からない。

結果的に、目に見える功績を残すことなく亡くなった郡兵衛だが、もし維新後も生きていたら、名前を残す存在になっていたはずである。



浄福寺にある本間新四郎家の墓

本間郡兵衛 年譜

年号 (西暦)	年齢 (数え)	出来事	国内・庄内の動き
文政5年 (1822)	1	9月、本間新四郎家の6代国光の二男として生まれる。	
天保4年 (1833)	12	子どもの頃は、覚寿院で四書五経の訓読を受け、父や兄から厳しく学問を仕込まれた。	洪水、雪、地震による凶作・飢饉
天保10年 (1839)	18	今町や船場町の遊里に出入りするようになる。	蚕社の獄
天保12年 (1841)	20		天保の改革 三方領知替え撤回
天保13年 (1842)	21	家出して江戸根岸の本間光憲宅に寄宿する。酒田に呼び戻され、矢島藩士・小番郡八の養子となる。矢島藩主生駒侯に従って江戸へ上るが、問題を起こし小番家から一時離縁される。	薪水給与令発令
天保14年 (1843)	22	養家を出奔。江戸に出て蘭学を学ぶ。この頃、浮世絵師葛飾北斎、根付師竹陽斎友親に弟子入りする。	庄内藩が印旛沼普請手伝いを命じられる
嘉永元年 (1848)	27	長崎に遊学する(8月～9月)。	飛島沖に異国船出沒
嘉永2年 (1849)	28	江戸の蘭学者杉田成卿に入門する	
嘉永6年 (1853)	32	六月五日、浦賀に赴き、黒船をスケッチする。	ペリーが浦賀に来航
安政元年 (1854)	33	同郷の佐藤与之助、真島雄之助が訪ねてくる。三人で清河八郎を訪ねる。	日米和親条約締結 下田・箱館・長崎を開港
安政2年 (1855)	34	勝海舟の推挙で幕府の「蕃書調所」の所員になる。勝塾の蘭学教師になる。	海軍伝習所設立 酒田湊付近及び西浜に砲台築造
安政3年 (1856)	35	長崎に行き、海軍伝習所の通辞を務める。	
安政5年 (1858)	37	兄・礼蔵にエンゲレス学(英学)を始めたことを手紙で伝える。	井伊直弼が大老になる 米露蘭英仏と修好通商条約締結 安政の大獄
安政6年 (1859)	38	アメリカ人宣教師フルベッキが来航。英語を学ぶ。	ドイツ人医師シーボルトが再来航 横浜・長崎・箱館で貿易開始
万延元年 (1860)	39		幕府軍艦咸臨丸がアメリカへ 桜田門外の変
文久2年 (1862)	41	念願の洋行を実現したらしい(事実を示す資料は不明)。	将軍家茂と皇妹和宮が結婚 生麦事件
文久3年 (1863)	42	攘夷運動が激化し、上海に一時避難したフルベッキの留守を預かる。	下関発砲事件 薩英戦争 清河八郎暗殺

年号 (西暦)	年齢 (数え)	出来事	国内・庄内の動き
元治元年 (1864)	43	薩摩藩校「開成所」の訓導師(教師)就任を依頼される。	禁門の変 第1回長州征伐 庄内藩が江戸取締りに当たる
慶応2年 (1866)	45	5月、開成所を辞任し、酒田への帰国を願い出る。 12月、鹿児島から船で大坂に向かう。	薩長連合成立
慶応3年 (1867)	46	正月、大坂に着き、薩摩藩が計画した「薩州商社」 設立準備のため大坂・京都を往復する。 8月、酒田に戻る。薩摩のスパイと疑われる。	大政奉還 薩摩藩邸焼き討ち
慶応4年 (1868)	47	7月17日、幽閉されていた鶴岡の親戚・池田六 兵衛宅で死去。毒殺されたともいわれる。	戊辰戦争 9月、明治に改元